実践女子大学所蔵
源氏物語古筆切目録稿（一）

横井　孝

「宮廷の華　源氏物語」展覧会（2014年6月7日）

緒　言

本学では、まだ年数が浅いものの、ここしばらく『源氏物語』など平安時代物語の古筆切を中心に収集してきた。数量としてはコレクションというほどの質量に達してはいないが、古筆切といえば歌切が圧倒的な数であるのに対して、特に物語に固執している点に特色があるはずだと思う。伝藤原為家筆『源氏物語』薄雲の巻の大四半切を八葉分まとめて所有していること、また先ごろテレビニュースや新聞で話題にしていただいた『夜の寝覚』断簡など、この特色をつよく意識した収集結果なのである。特にこの後者、永らく待望されていた『夜の寝覚』末尾欠巻部と特定できる古筆切が出現した際、これを収めることができたのは幸いであった。

大学という機関が教育を本分とすることはいうまでもないが、同時に、そこに保有する知的財産を社

会に還元することもまた使命の一つである。そこで、右の『夜の寝覚』断簡の披露を兼ねて、昨年二〇一四年（平成二六）六月の渋谷新校舎落成記念の企画「宮廷の華　源氏物語」の第一部として、同月七日（土）～一〇日（火）に展覧会を開催した。

前頁の写真は、展覧会のようすを撮したもの。短い期間であったにもかかわらず、報道の効果もあったか、ごらんのような大勢の観客に恵まれ、一般にも関心の高いものであることが察せられた。さらに、古典文学の専門家たちも少なくない方たちが立ち寄ったということであった。これは、――自慢話めいて恐縮ではあるが――古筆切を収集するにあたって、本学がこれまでとってきた方針やその収蔵品が、社会に一定の評価を得たことになるのではなかろうか。

とすれば次なる段階は、身近に検討できる立場をとおして、これらを専門的な眼で記録し、ひろく研究者たちの利用に供することである。そうすることによって、実践女子大学所蔵の典籍の認知度が高まり、同時に、これらを研究で活用した方々からさまざまな知見がもたらされることにもなろう。――そうした相互作用を期待するところから、まだまだ「数量としてはコレクションというほどの質量に達してはいない」とはいうものの、あえて「目録稿」を草することとした所以である。

なお、本稿タイトルを「源氏物語……」としたが、右の『夜の寝覚』の例にもあるごとく、他作品の古筆切との縁の深いものもあり、また古注釈や源氏歌集のような梗概書の断簡など、必ずしも『源氏物語』のテキストでないものも含まれる、ゆるやかな括りであることを諒解して頂きたいと思う。

さらに、本研究所の刊行物等と内容が重複することのある点、目録稿としての性格上やむをえないものとしてご諒解願えれば幸いである。

例　言

本稿は、紙幅の関係で一部のみ掲載し、本号は（一）とする。本誌各号ごとにほぼ『新撰古筆名葉集』にしたがって（伝称）筆者別に古筆切を収載する。

掲載内容は、国文学研究資料館編『古筆への誘い』（三弥井書店、二〇〇五年三月刊）に準拠し、〔鑑定〕〔書誌〕〔本文〕〔筆者〕〔解説〕の項目をあげた。次に各項目について、同書より引抄する。

〔鑑定〕「極札・正筆書・裏書・箱書など、当該切を鑑定した諸資料の記載を掲げ、可能な限りその図版を挙げた。鑑定印については、（琴山）（守村）など丸括弧内に印文を示したが、解読不能箇所には■印を付した」

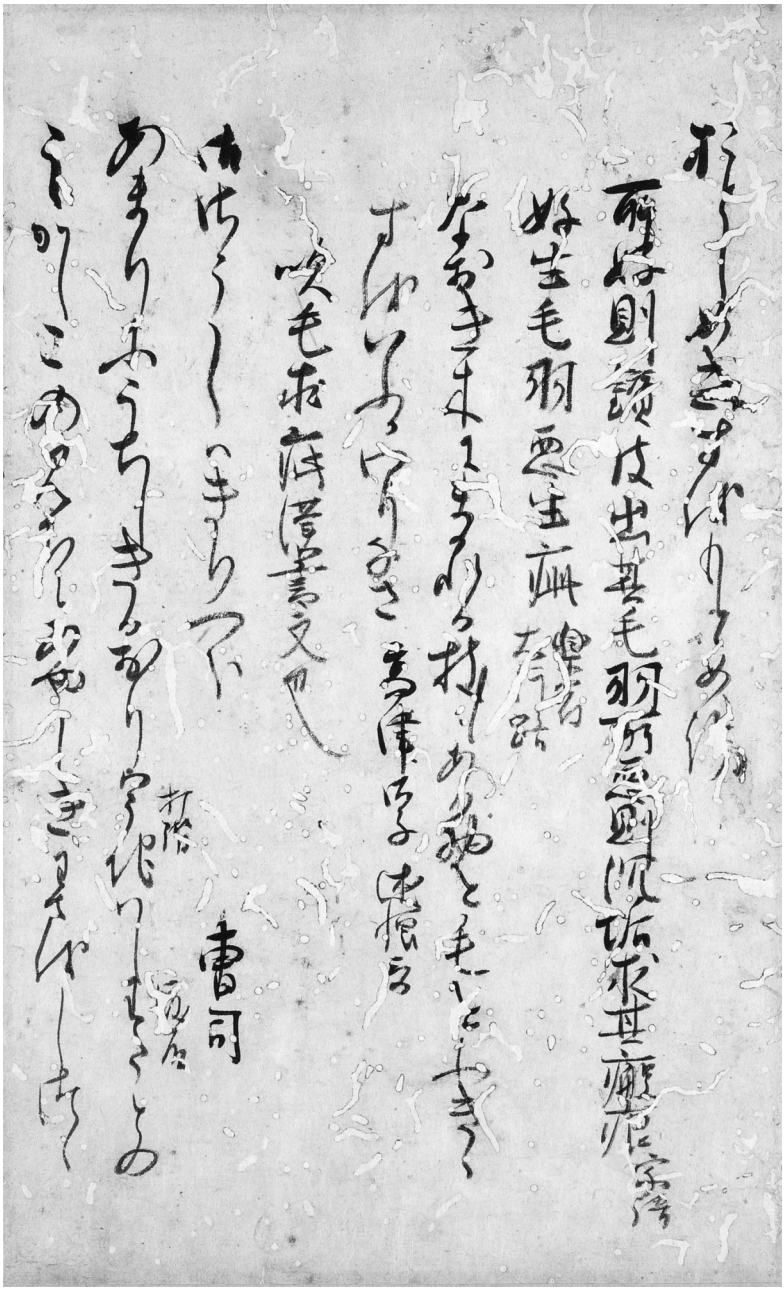
〔書誌〕「当該切の縦横の寸法……料紙などについて、基本的な書誌事項を記した」

〔本文〕「当該切の翻刻本文を掲げた。……なお、解読不能箇所には■印を付した」

〔筆者（伝称筆者）〕「……極札など鑑定によるものについては《伝称筆者》としてその名を掲げた」

〔参考〕本目録の新設項目。当該古筆切について直接間接に言及した文献を明記し、詳細な検討はそれに譲ることとする。

なお、〔所蔵〕欄に関して、実践女子大学所蔵の古筆切は図書館（日野・渋谷）・文芸資料研究所・国文学科研究室に分蔵しているが、「下田記念中世古筆群」と全体を仮称しており、学内における区別は対外的に意味のないものとして省略する。



〔鑑定〕A箱書・オモテ「細川切四半」、ウラ「浪華偶居東田居主題（朱印）」
B紙片「四辻宮　善成（二字朱筆）」

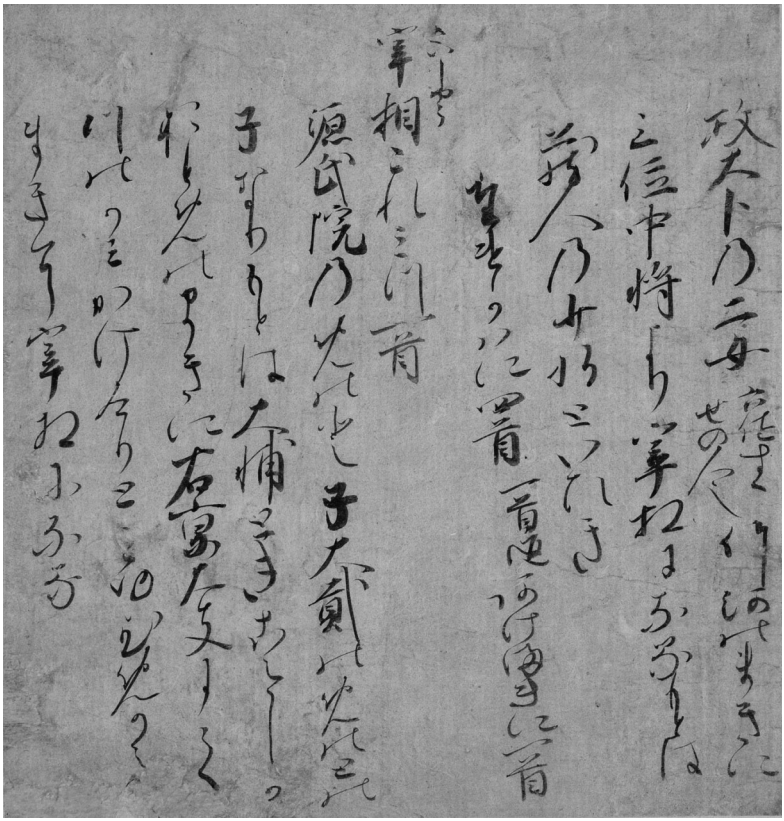
〔書誌〕縦二七・四cm、横一六・七cm。軸装。

〔本文〕おとしめきすをもとめ給
所好則鑽皮出其毛羽所悪則況垢求其瘢痕家語
好生毛羽悪生疵（楽府太行路）
なおき木にまかれる枝もある物を毛をふきゝ
すをいふかわりなさ高津御子述懐哥
吹毛求疵漢書文也
御さうしはきりつほ　曹司
あまりにうちしきるおりうち（打橋）はしわた（渡殿）との
こゝかしこのみちにあやしきわさをしつゝ

〔伝称筆者〕四辻善成

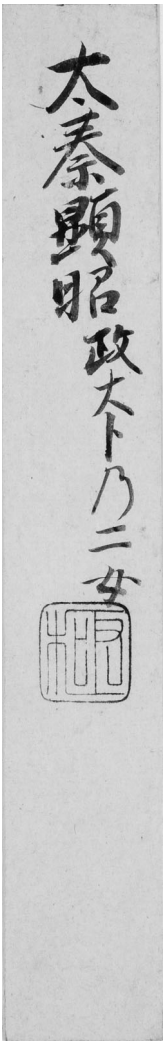
〔解説〕室町時代初期の書写。『源氏物語』本文を記したものではなく、その注釈書『河海抄』桐壺の巻の一節を記したもの。四辻善成（一三二六～一四〇二）は順徳天皇の曽孫。尊雅王の子。姪の良子が足利義満らの生母。歌人・学者であり、『源氏物語』の注釈書『河海抄』『珊瑚秘抄』の著者。ただし、本断簡は善成の筆跡とは異なる。

〔参考〕田中登「源氏物語関係古筆切三種」（文芸資料研究所『年報』第三〇号、二〇一一年三月）。



〔鑑定〕A極札・オモテ「太秦顕昭（政大臣の二女）（「極」黒）」

ウラ「切／六半／拾行（「御免古筆所」朱）庚戌四（「川宗」黒）」



B箱書・オモテ「太秦顕昭六半切」

ウラ「建仁寺切也　浪華法眼塊堂鑒題（「塊堂／審定」朱）」

〔書誌〕縦一五・二cm、横一四・五cm。軸装。

〔本文〕政大臣の（二女六位すくせの人也）竹河のまきに

三位中将より宰相になるもとは

蔵人の少将といひき

たけかはに四首（一首返）あけまきに一首

宰相（さいしやう）これみつ一首

源氏院のめのと子大弐のめのとの
子なりもとは大輔ときこえしか
おとめのまきに右京大夫にて
つのかみかけたりとみゆむめかえ■
まきに宰相になる

〔伝称筆者〕顕昭

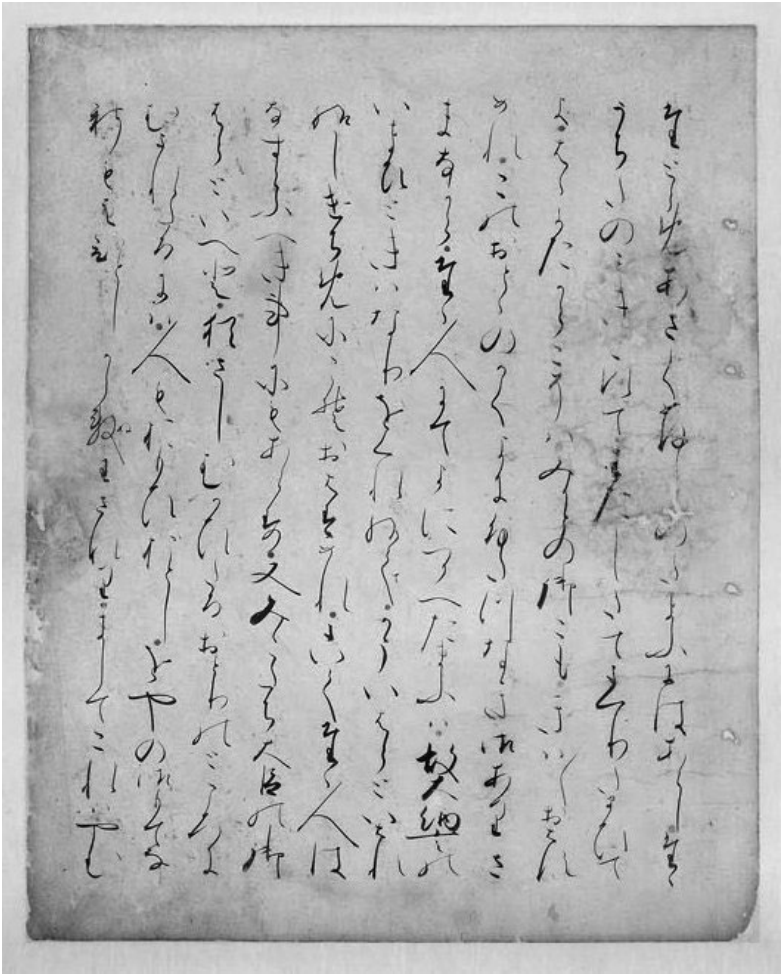
〔解説〕鎌倉中期の書写。左裾に擦れの痕跡あり、行末が見えにくく、九行目一文字ほど墨痕あるが不明、「の」か。『新撰古筆名葉集』に「建仁寺切　六半源氏景図註」とあるが、田中登の指摘のごとく『源氏物語』中の「和歌作者目録」というべき佚名の六半本冊子の一部と見るべきである。顕昭（一一三〇頃～一二一〇頃）は六条藤家の歌人。歌学書『袖中抄』、藤原俊成判の『六百番歌合』の批判書『六百番陳状』などの著者。

田中塊堂（一八九六～一九七六）は、日本書芸院理事長・帝塚山学院大学教授・日本書道美術館館長・日展参与などをつとめた書家。一九六九年、日本芸術院賞受賞。箱書を請われることが多かったと見え、本学蔵では定家の紹巴切後撰集に「後撰集巻十一　浪華法眼塊堂識（印）」とある。

極札は初代川勝宗久。古筆家第五代・了珉の弟子。

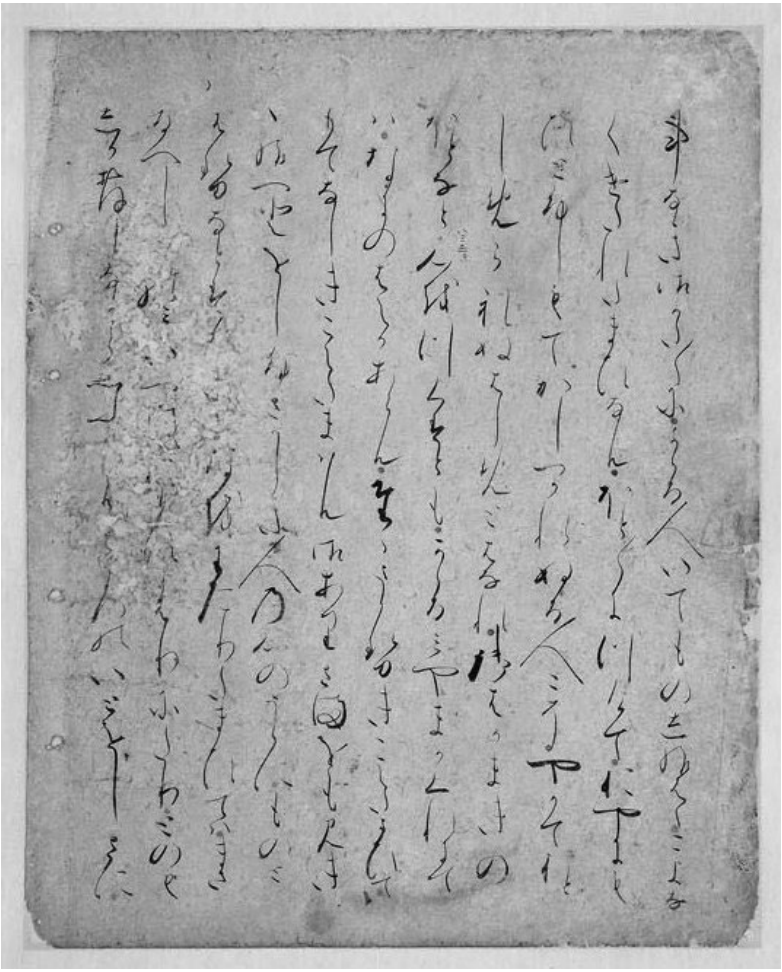
〔参考〕田中登「源氏物語関係古筆切三種」（文芸資料研究所『年報』第三〇号、二〇一一年三月）。

〔三〕藤原為家　大四半切『源氏物語』（河内本）薄雲の巻・六葉



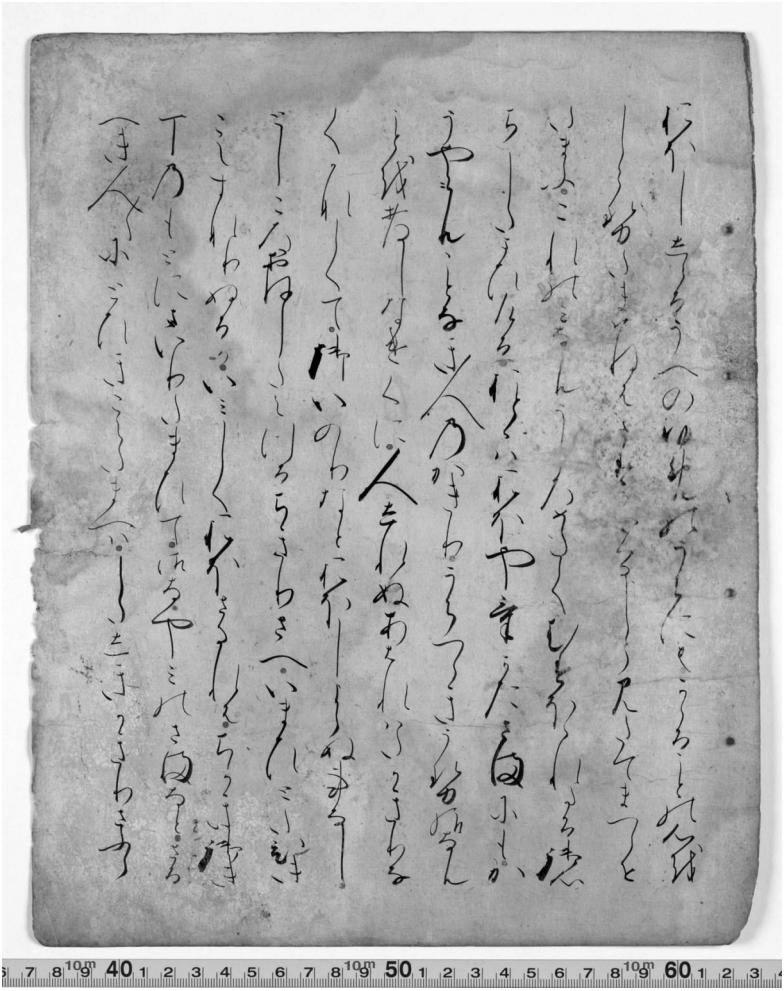
①

〔鑑定〕ナシ。
〔書誌〕縦三二・九cm、横二六・三cm。字高二八cm。斐紙。軸装。
〔本文〕たとらめ・あさくおほしのたまふにはあらし・たゝ（「・」は朱点。以下同）
うちたのみきこえて・わたしたてまつりたまひて
よ・はゝかたからこそは・みかとの御こも・きは〳〵おはす
めれ・このおとゝのかくよにふたつなき御ありさ
まなから・たゝ人にてよにつかへたまふは・故大納言の
いまひときはなりをくれ給て・かういはらといはれ
給しけちめにこそおはすめれ・まいてたゝ人は
なすらふへき事にもあらす・又みこたち大臣の御
はらといへと・猶さしむかひたるおとりのところに
むまれたるには・人もおもひおとし・をやの御もてな
しもえひとしからすわさなり・ましてこれはやむ
〔筆者〕不明。ただし一連（①～⑧）の伝為家筆と同筆。
〔解説〕『源氏物語』薄雲の巻冒頭近くの一節、『源氏物語大成』六〇四頁10行目～六〇五頁3行目に相当。右端にも
と大和綴であった穴の痕跡が四つある。左右の端に湿損で紙の繊維が蒸れた痕あり。本文は一一行書き、句読に朱
点が打たれていて、河内本の形状をなし、「4おとゝ（河）―おとゝの君青」「4かく（河）―ナシ青」「6なりをく
れ（河）―なりおとり青」など、本文も河内本。



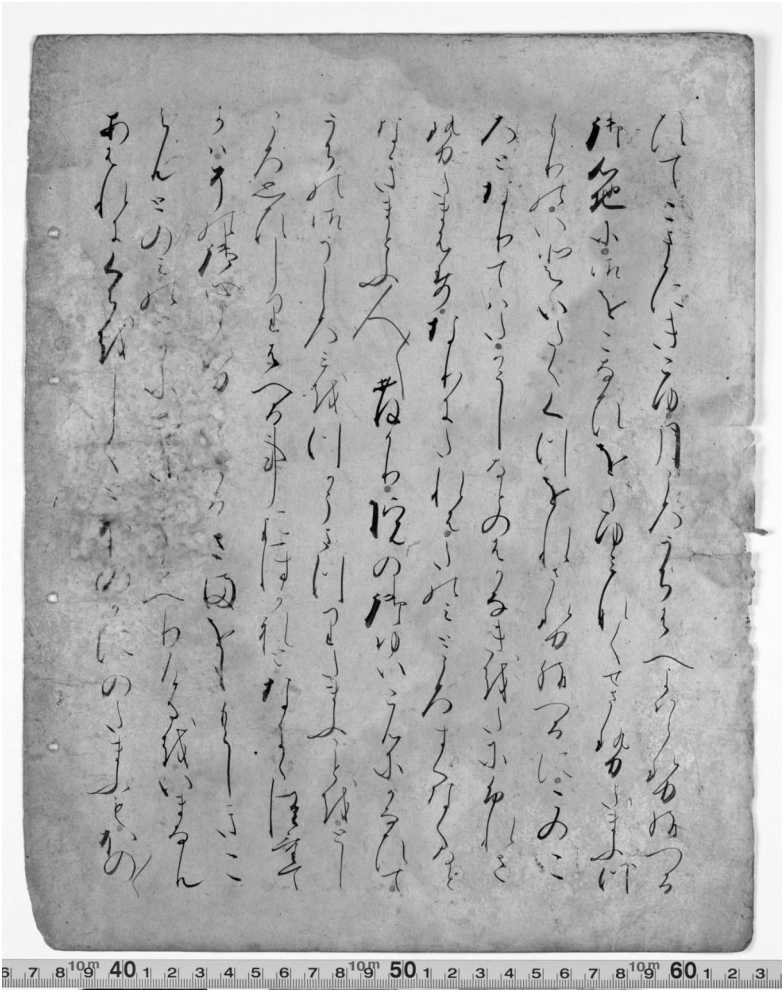
②

〔鑑定〕ナシ。
〔書誌〕縦三二・九cm、横二六・二cm。斐紙。軸装。
〔本文〕事なき御かた〳〵に・かゝる人いてものし給はゝ・こよな
くけたれたまひなん・ほと〳〵につけて・おやにも
ひとふしもてかしつかれぬる人こそ・やかておと
しめられぬはしめとはなれ・御はかまきの
ほとなと。心(いみしき)をつくすとも・かゝるみやまかくれにて
は・なにのはえかあらん・たゝまかせきえたまひて・
もてなしきこえたまはん御ありさまをも見き
ゝ給へとをしふ・さかしき人の心のうらに・ものと
はせなとするにもなをわたりたまひては・まさ
るへしとのみいへは・おもひよはりにたり・とのも
しかおほしなから思ふらんところのいとをしさに
〔筆者〕不明。①⑤と同筆。
〔解説〕薄雲の巻、『源氏物語大成』六〇五頁3行目～9行目に相当。本文は①に後接する。①の丁のウラにあたる部分であり、もともと表裏一枚の紙が剡がされて二枚になったものである。8行目「心のうらに」、11行目「思ふらん」は河内本の本文で、定家本には、それぞれ「心のうらともにも」「おもはむ」とある。



③オモテ

〔鑑定〕ナシ。
〔書誌〕縦三二・九cm、横二六・一cm。斐紙。断簡一枚のオモテ。
〔本文〕おほししらる・うへのゆめのうちにも・かゝることの心を
しらせたまはねは・さすかに心くるしう見たてまつらせ
たまふ・これのみなんうしろめたくむすほゝれたる御心
ちしたまひける・おとゝはおほやけかたさまにも・か
うやもんことなきひとのかきり・うちつゝきうせ給なん
ことをおほしなけくに・人しれぬあはれはたかきりな
くかなしくて・御いのりなとおほしよらぬ事なし・
としころおほしたえつるちきりさへ・いまひとたひ・き
こえすなりぬるか・いみしくおほさるれは・ちかき御き
丁のもとにまいりたまひて・御なやみのさまなと・さる
へき人〳〵にとひきこえたまへは・したしきかきりさふら
〔筆者〕①②⑤と同筆。
〔解説〕薄雲の巻、『源氏物語大成』六一五頁13行目～六一六頁6行目に相当。本文は次の④の直前に直接に接する。つまり、④の丁のオモテにあたる部分である。写真の断簡は表裏そろっており、古筆切として剟がされる直前、もとの結び綴じ＝大和綴に綴じられていた形態をよく保存する貴重な資料である。



④

〔鑑定〕ナシ

〔書誌〕縦三二・九cm、横二六・一cm。斐紙。断簡一枚のウラ。

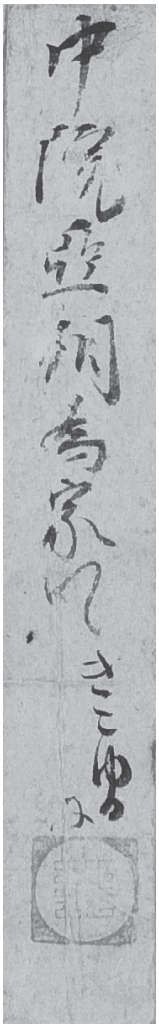
〔本文〕ひてまかにきこゆ・月ころうちはへよはらせ給つる
御心地に・御をこなひをたゆみなくせさせたまふつ
もりの・いといたくくつをれさせ給へるに・このこ
ろとなりてはた・かうしなとのはかなきをたにふれさ
せたまはす・なりにたれは・たのみところすくなくなと
なきまとふ人〳〵おほかり・院の御ゆいこんにかなひて・
うちの御うしろみをつかうまつりたまふことを・とし
ころ思ひしりたまへる事おほかれと・なにゝつけて
かは・その御心よせことなるさまをもらしきこ
えんとのみ・のとかに思きこえはへりけるを・いまなん
あはれにくちをしくとほのかにのたまふも・ほの〳〵

〔筆者〕不明。これまでの伝為家筆と同筆。

〔解説〕薄雲の巻、『大成』六一六頁6行目～六一六頁12行目に相当。大和綴から半分を切り取られたままで、剡がされて表装される以前の姿である。従って、本文は③に直接つづいている。さらに、次の断簡⑤に直に接続し、光源氏の見舞いに対して、藤壺がこれまでの配慮に感謝を述べる一節である。

⑤

〔鑑定〕極札オモテ「中院亜相為家卿きこゆるに（「■」＝印文不明、黒）」
ウラ「　（「茂入／道順」朱）　」。



（表）

（裏）

〔書誌〕縦三三・一cm、横二五・二cm。斐紙。断簡一枚。

〔本文〕きこゆるに・御いらへもえきこえやりたまはす・ないたまふ
さまいみし・なとかくしも心よはきさまにと・人めをお
ほしかへせと・いにしへよりの御ありさま・おほかたのよ
つけてもあたらしくおしき人の御さまを・こゝろに
かなふわさならねは・かけとゝめきこえんかたなくて・
いふかひなくおほさるゝことかきりなし・はか〳〵ぬ

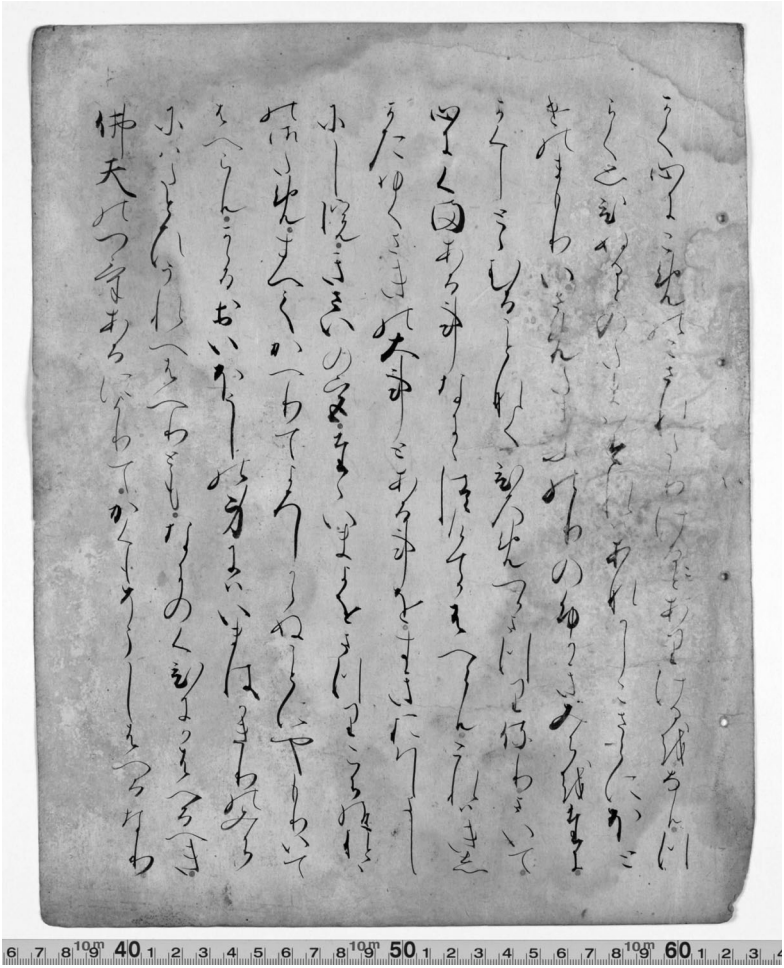
みなからも・むかしより御うしろみつかうまつるへき
ことを・こゝろのいたるかきりはおろかならすおもふたまへ
るを・おほきおとゝかくれたまひぬるをたに・世中心
あはたゝしく思ひたまへなけくに・かく又おはしませ
は・よろつにこゝろみたれ侍りて・よに侍らん事も・のこ

〔伝称筆者〕藤原為家。

〔解説〕薄雲の巻、『大成』六一六頁12行目～六一七頁5行目に相当。右の④に直に後接する部分であり、丁のオモテである。③④が丁の表裏を保存する姿であったのに対して、これはウラがはがされたままで、補修されて表装される直前の形であることがわかる。裏返した右上隅に小字で「薄雲十九丁」の墨書がある。

本文は、前の④に直接につづく一節である。源氏の見舞いに対して、病篤い藤壺の宮が「院の御ゆいごん（遺言）にかなひて……」（④の断簡）と桐壺院の遺言に従って源氏が冷泉帝への後見を続けたことに謝しつつも、その「御心よせことなるさま」を帝に伝えられなかったことを「いまなんあはれにくちをしく」と後悔の念を漏らす。それに対して源氏は、太政大臣（かつての左大臣）が亡くなり、藤壺が重態の状態の悲しさに自分の命も残り少なに感じる、とかき口説く場面である。

本断簡には極札（縦一二・三㎝、横一・九㎝）に初代朝倉茂入の極めがあり、藤原為家（一一九八～一二七五年）筆とする。もとより伝称筆者にすぎないが、書写年代はほぼ相当のものと認められている。



⑥

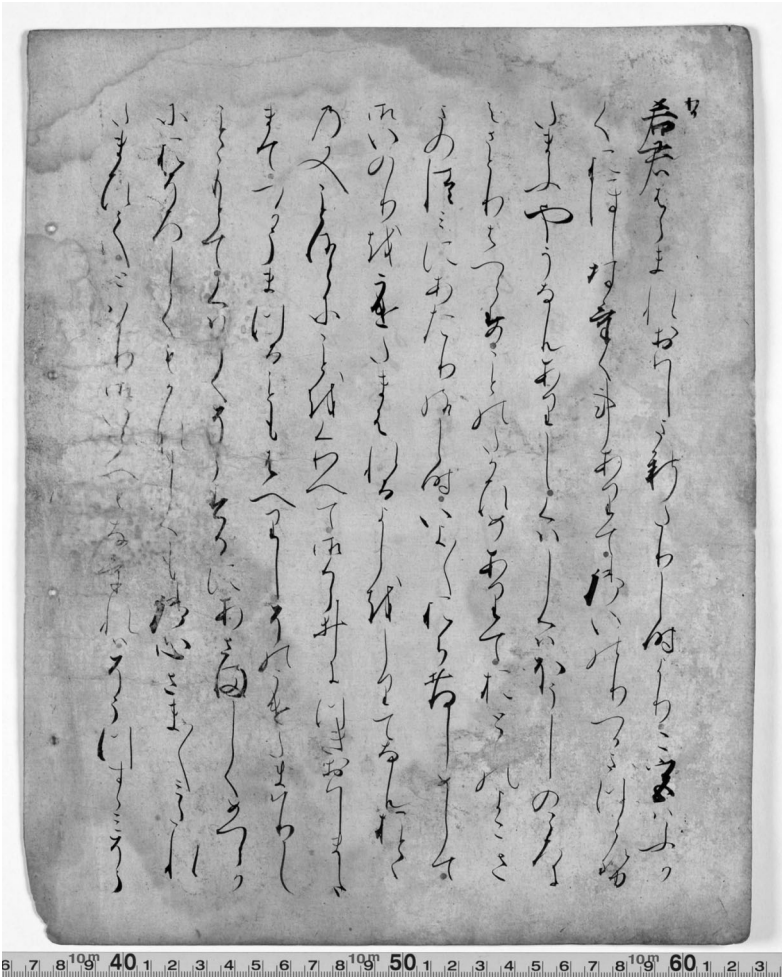
〔鑑定〕ナシ

〔書誌〕縦三二・九cm、横二六・二cm。斐紙。断簡一枚のオモテ。

〔本文〕かく心にこめのこされたりけるとありけるをなん・つ
　らく思ひぬるとのたまはすれは・あなかしこさらにほと
　けのまもりいさめたまふのりのふかきみちをたに・
　かくしとゝむることなく・ひろめつかまつり侍り・まいて・
　心にくまある事なにゝつけてかはへらん・これはきし
　かたゆくさきの大事とある事を・すきおはしまし
　にし院・きさいの宮・たゝいまよをまつりこち給おとゝ
　の御ため・すへてかへりてよろしからぬことにやもりて
　はへらん・かゝるおいほうしの身にはいまはかきりのみち
　にはたとひうれへはへりとも・なにのくひかはへるへき・
　仏天のつけあるによりて・かくもそうしはへるなり・

〔筆者〕不明。これまでの伝為家筆と同筆。

〔解説〕薄雲の巻、『大成』六一九頁11行目～六二〇頁4行目に相当。次の⑦のオモテ側である。実践女子大学は二葉、表裏をそなえている断簡を蔵している、その二枚目。本文は、夜居の僧都に冷泉帝が声をかけると、僧都は、本文の二行目「あなかしこ…」と帝の出生の秘密を語り出す場面である。1行目「心にこめのこされ」は、定家本では「しのひのこされ」とある箇所。



⑦

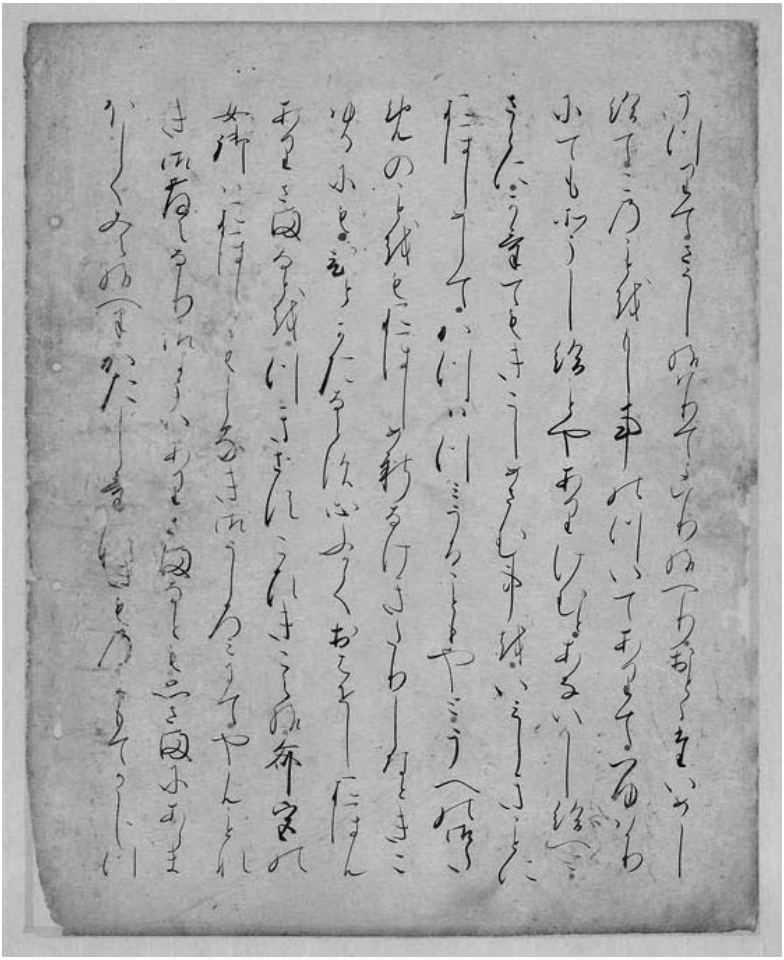
〔鑑定〕ナシ

〔書誌〕縦三二・九cm、横二六・二cm。斐紙。断簡一枚のウラ。

〔本文〕若君はらまれおはしましたりし時より・こ宮はふか
くおほしなけく事ありて・御いのりつかまつらせ
たまふやうなんありし・くはしくはほうしのころに
えさとりはへらす・ことのたかひめありて・おとゝのよこさ
まのつみにあたり給し時・いよ〳〵おちおほしめして・
御いのりをうけたまはれるよしをしりてなん・おとゝ
の又ことさらにことをくわへて・御くらゐにつきおはしましゝ
まて・つかうまつることもはへりし・そのうけたまはりし
ことゝもとて・くはしくそうするに・あさましくめつらか
におそろしくもかなしくも・御心さま〳〵みたれ
たまひて・とはかり御いらへもなけれは・そうつすゝみそう

〔筆者〕不明。これまでの伝為家筆と同筆。

〔解説〕薄雲の巻、『大成』六二〇頁4行目～11行目に相当。前の⑥のウラ側である。夜居の僧都が秘密を暴露する場面。藤壺の宮が冷泉帝を懐妊した折、光源氏の流謫時にことさら祈祷を依頼されたことなどから二人の関係をほのめかしたのである。六行目「御いのりを」は河内本の本文。「かさねて御いのりとも」がいわゆる青表紙本の本文である。以下、六・七行目に異同が集中している。



⑧

〔鑑定〕ナシ

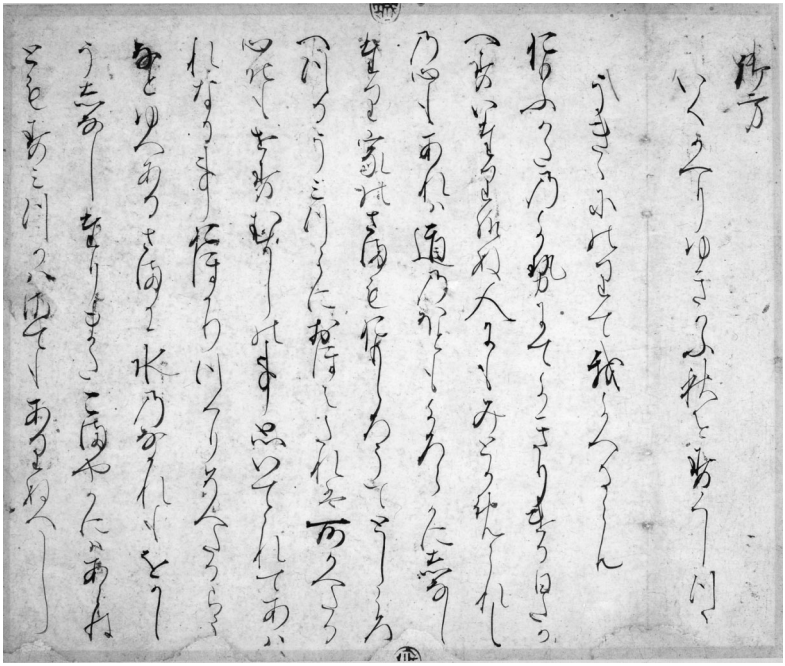
〔書誌〕縦三二・八cm、横二六・三cm。斐紙。軸装。

〔本文〕うつりて・さうし給はりてまいり給へり・おとゝたいめし
給て・このことをもし事のついてありて・つゆはかり
にてもそうし給ことやありけむと・あないし給へと・
さらに・かけてもきこしめさむ事を・いみしきことに
おほしめして・かつはつみうることもやと・うへの御た
めのことをもおほしめしなけきたりしなときこ
ゆるにも・ひとかたならす心ふかくおはせしおほん
ありさまなとを・つきせすこひきこえ給・斎宮の
女御はおほしゝもしるき御うしろみにて・やんことな
き御おほえなり・御よういありさまなとも・思さまにあらま
ほしくみえ給へは・かたしけなきものにもてかしつ

〔筆者〕不明。これまでの伝為家筆と同筆。

〔解説〕薄雲の巻、『大成』六二五頁1行目～8行目に相当する。出生の秘密を知った冷泉帝から譲位の意志をほのめかされた源氏が、藤壺付の女房であった王命婦に対面し、漏洩の事実をさぐる場面である。

〔参考〕田中登「伝藤原為家筆『源氏物語』薄雲巻断簡の紹介」（文芸資料研究所『年報』第二八号、二〇〇九年三月）。

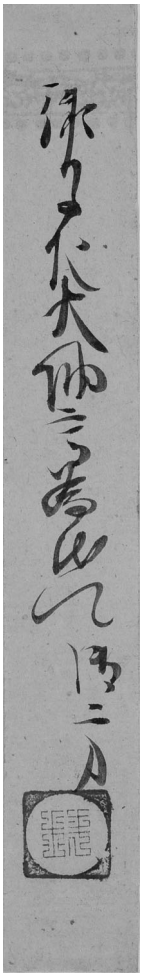


御方

いくかへりゆきかふ秋をすくしつゝ
へうきゝにのりて我かへるらん

おもふかたのかせにてかきりける日たか
へすいたり給ぬ人にもみとかめられし
の心もあれは道のほともかろらかにしなし
たり家のさまもおもしろうてとしころ
へつるうみつらにおほえたれは所かへたる
心地もせすむかしの事思いてられてあは
れなる事おほかりつくりそへたるらう
なとゆへあるさまに水のなかれもをかし
うしなしたりまたこまやかにあらね
ともすみつかはさてもありぬへし

〔鑑定〕極札「御子左大納言為氏卿御方（「■」＝印文不明、黒）」



〔書誌〕縦一六・四cm、横一九・六cm。鳥の子。二枚（二行・一〇行）を継いで軸装してある。もとは一面一一行書きか。本紙の上下に割印（墨印）がある。

〔本文〕前頁下段。

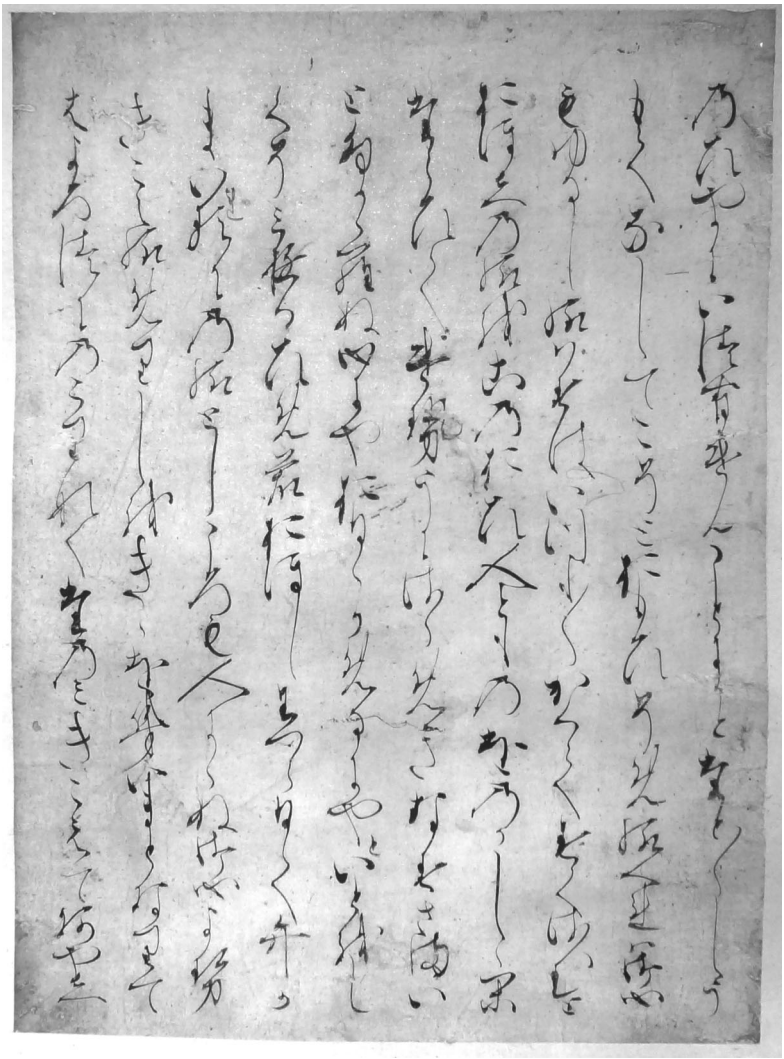
〔伝称筆者〕二条為氏。

〔解説〕『源氏物語』松風の巻、『源氏物語大成』五八六頁10行目～五八七頁3行目に相当。明石の君が上京し、洛西の大堰の邸に移り住む場面。冒頭に明石の君の歌がある。

為氏（一二二二～一二八六）は鎌倉時代後期の歌人、為家の嫡子で二条家の祖。

『古筆学大成』第二三巻にいう「伝二条為氏筆源氏物語切（二）」と同筆か。同書に収める断簡は「たて一七・四センチメートル、よこ一六・八センチメートル。升型本の断簡である。いかにも歯切れのいい闊達な書風で、十三世紀後半の書写と見る。「澪標」の巻で、青表紙本の系統である」という。本断簡も本文は「定家本」、いわゆる青表紙本系統のものである。ただし『古筆学大成』断簡は一面一〇行書きか。

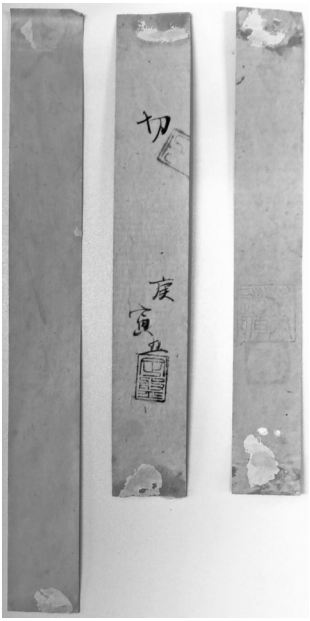
極札は初代朝倉茂入の極。ウラ白。



〔鑑定〕極札Aオモテ「民部卿局のひやかに（「■」＝印文不明、黒）」
Bオモテ「民部卿局　のひやかに（「養／心」朱）」、ウラ「　切（朱割印）庚寅五（「定盤」黒）」
Cオモテ「民部卿局　（「無物／証」朱）のひやかに　（「了廬」朱・瓢箪形）」

（表）

（裏）



〔書誌〕縦二〇・二cm、横一四・九cm。鳥の子。軸装。

〔本文〕のひやかにいつ有けんことにかとたと〳〵しう
もてなしてこそとおもひそめ給へれは御心
もゆるし給はすはいつも〳〵かくてすくさむと
おほしの給をこのおひ人とものをのかし〻か
たらひてけせうにさ〻めきなすさまい

とふかゝらぬ心にやおひゝかめるにやいとをし
くそみゆるひめ君おほしわつらひて弁か
まいるにの給としころも人にゝぬ御心よせ
きこえ給めりしをきゝをいまとなりて
はよろつにのこりなくたのみきこえてあやし

〔伝称筆者〕民部卿の局。〔四〕伝為氏筆と同一筆者かとも思われるが、そちらが六半の升型本であるのに対して、こちらは四半本であろうから、もとよりツレではない。

〔解説〕『源氏物語』総角の巻、『源氏物語大成』一六〇四頁11行目～一六〇五頁2行目に相当。八の宮の喪が明け、薫が宇治の邸を訪問し、日が暮れても帰ろうとしないという場面。

1行目「たと〳〵しう」は定家本・河内本ナシ。2行目「給へれは」は定家本・河内本「給ひけることなれは」、5行目「さゝめきなす」は、定家本「さゝめき」（肖柏本「さゝめきなとすなるへし」）河内本「さゝめきなとす」などとあり、本文は別本。なかでも平瀬本にやや近いか。

極札Aは初代朝倉茂入の極。ウラ白。極札Bは神田道伴の極。道伴（定盤）は神田家第四代。極札Cは恒川了廬の極。了廬は古筆家第八代・了意の弟子。

（以下次号）